



植民地を愛した作家カミュ 「最初の人間」

監督／脚本／ジャンニ・アメリカ 原作／アルベール・カミュ
出演／ジャック・ガンブラン カトリーヌ・ソラ マヤ・サン
サほか 撮影／イヴ・カルフ 音楽／フランコ・ピエルサント
2011年フランス・イタリヤ・アルジェリア
フランス語 105分 12月15日より東京・神田神保町岩波
ホールほか全国順次ロードショー ©Café de

◆作家A・カミュは1960年、交通事故のため46歳の若さで急死。その靴から発見された未完の自伝小説は94年に出版され、当時大きな反響を呼んだ。映画化は初めてという。

◆作家コルムリ（カミュ自身）は1956年、母親がひとりで暮らす故郷アルジェリアを訪れる。当時フランスの植民地だったアルジェリアは、独立を求めるイスラム系民衆と、フ

ランス軍の強大な権力を背景にした植民者との間の対立がのびきなくなっていた。学生を前にした講演会で、作家は「アラブ人とフランス人が共存できる可能性」を強調するが、左右両派から非難を浴びる。

◆フランスからの移民3代目の父は第1次大戦で戦死、彼はアルジェリア東部の小村で厳格な祖母とやさしい母親に育てられた。貧しいながらも幸福だった幼少時代が、数々の挿話を通じて活き活きと美しく描かれる。小学校で同級だったアラブ人ハムッドは、優等生の彼をいつも敵視し、喧嘩の後も和解の握手を拒んだ。30年後ハムッドは、有名作家となったカミュに連絡をとってくる。ハムッドの息子はFLN（アルジェリア民族解放戦線）の爆弾を運んだとして死刑判決を受けたのである。カミュは軍の上層部につけあつて必死に奔走するが、判決を動かすことはできず、父子の面会の許可をとるのがやっとだった。（獄中の面会の悲痛な場面は、忘れがたい。）

◆カミュは長い間アルジェリア問題について沈黙を守り、批判の対象になった。フランス軍による拷問や残虐行為に対しサルトル、モーリヤックら多くの知識人が抗議の声をあげた時も黙っていた。しかしこの間に彼は、150人以上ものFLN関係者の助命・減刑運動に駆け回っていた（オリヴィエ・トッド『アルベール・カミュ』）。57年、ノーベル文学賞を受賞した時の記者会見（映画ではラジオ放送）では、こう言った。「私は、いつも公正なア

ルジェリアの味方であり、二つの民族は平和に対等に生きるべきだと思う。だが無差別テロには反対する。街角で盲目的に起こる爆発は、いつか愛する者に襲いかかるかも知れない。私は正義を信じるが、それは母を敵としない限りだ。母を傷つける者は、私の敵だ。」

◆この会見が世界中に大きく報じられると、再び批判の声が高まった。「カミュは比較できない価値を対置した」「彼は所詮コロシ（植民者）の立場を脱することができなかった」「対独レジスタンスでは対抗暴力の正当性を認めたのに」等々。カミュはいちいち反論しなかったが、ある新聞記事の筆者あての手紙で、こう書いた。『正義の人びと』の主題はまさしく今日われわれが直面している主題であり、私の考えは今も当時も変わりません」「女性と子どもを殺す者に対しては、嫌悪感しか覚えません」。（注・カミュの戯曲『正義の人びと』の主人公は暴虐な帝政ロシアの大公の馬車を狙うが、2人の子どもが同乗していたため爆弾を投げるのをやめる）

◆カミュの発言や行動がアルジェリア戦争の帰趨にどれほどの影響を与えたかといえは、それはゼロに近かったかも知れない。作家の死から2年後、数十万人の血を代償としたアルジェリアの独立は達成され、フランスは広大な植民地を失った。30年後、軍部とアラブ原理派との対立が激化、アルジェリアは再び内戦状態となり流血が繰り返された。

本野義雄（もとの・よしお／本誌編集委員）